

(1) 長崎古墳横穴式石室基底石（南より）



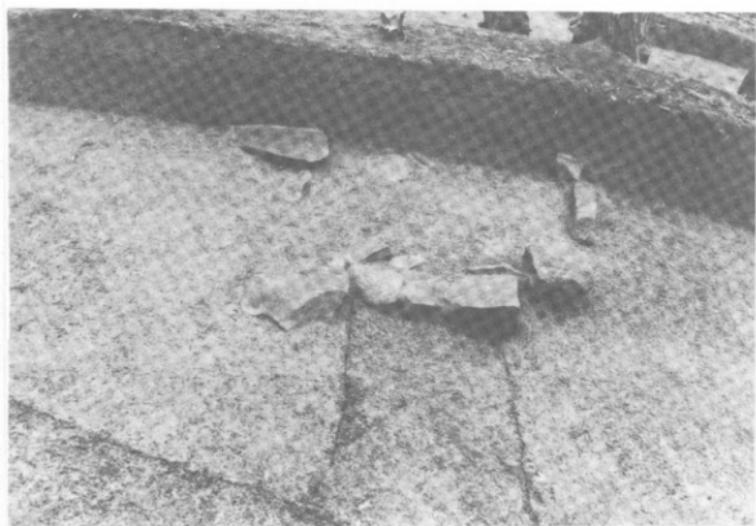
(2) 長崎古墳横穴式石室振り方（南より）



(1) 長崎古墳土層
(南より)



(2) 長崎古墳土層
(南より)



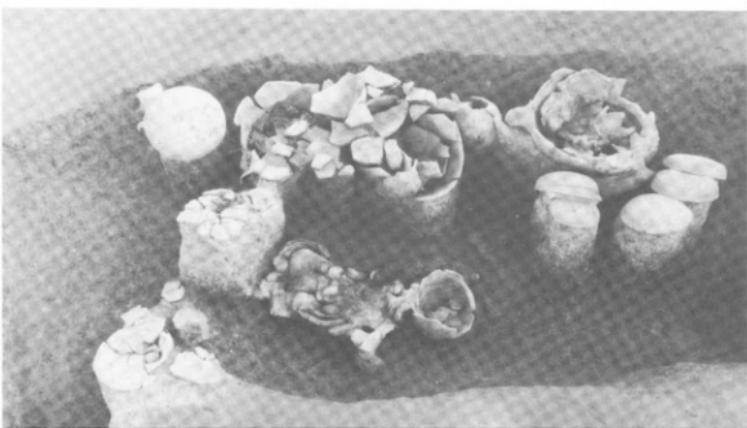
(3) 長崎古墳玄門部
(南より)



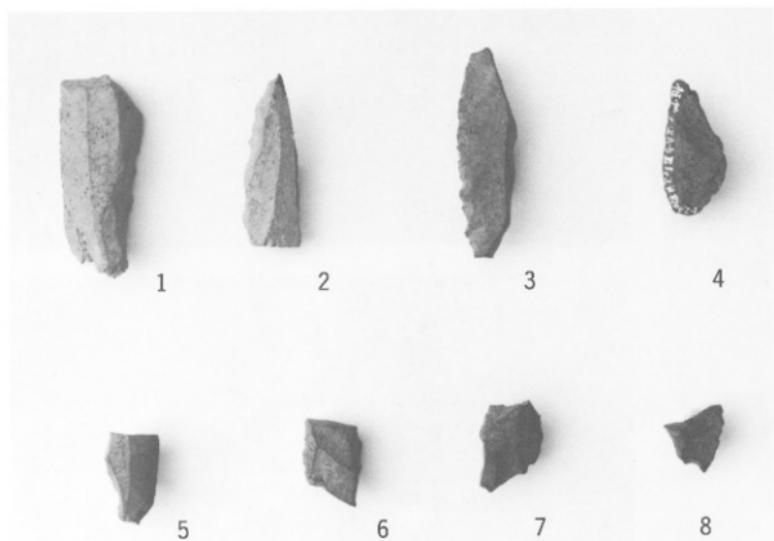
(1) 長崎古墳周濠内
土器出土状態
(西より)



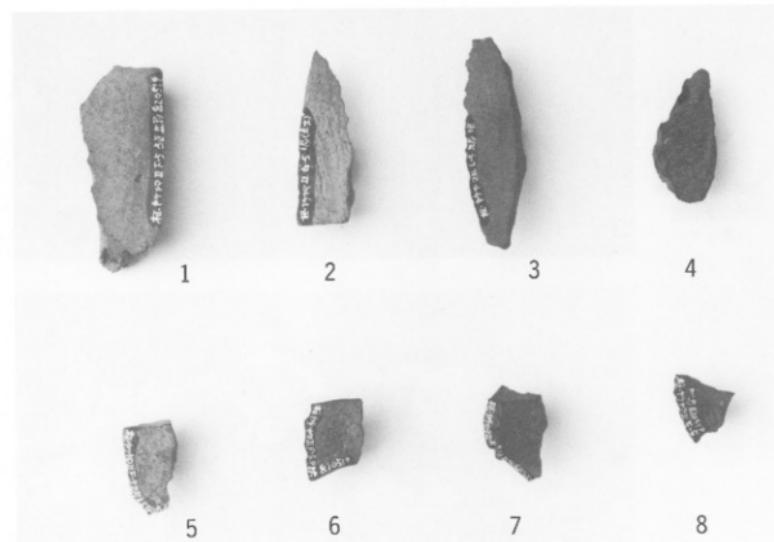
(2) 長崎古墳周濠内
土器出土状態
(西より)



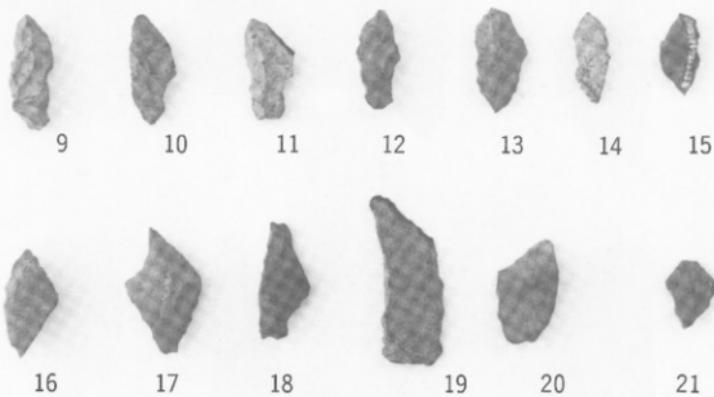
(3) 長崎古墳周濠内
土器出土状態
(北より)



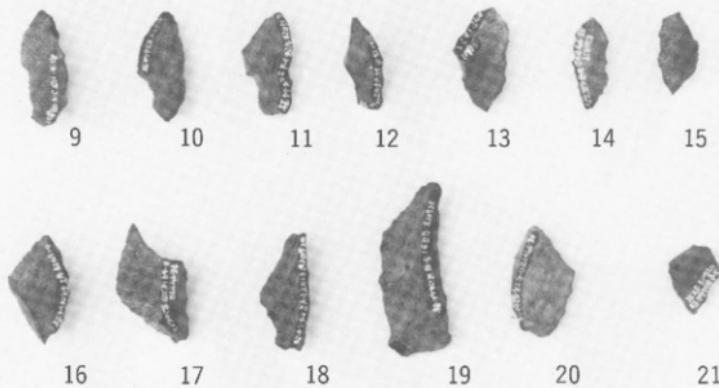
(1) ヤケヤマ遺跡出土ナイフ形石器（背面）



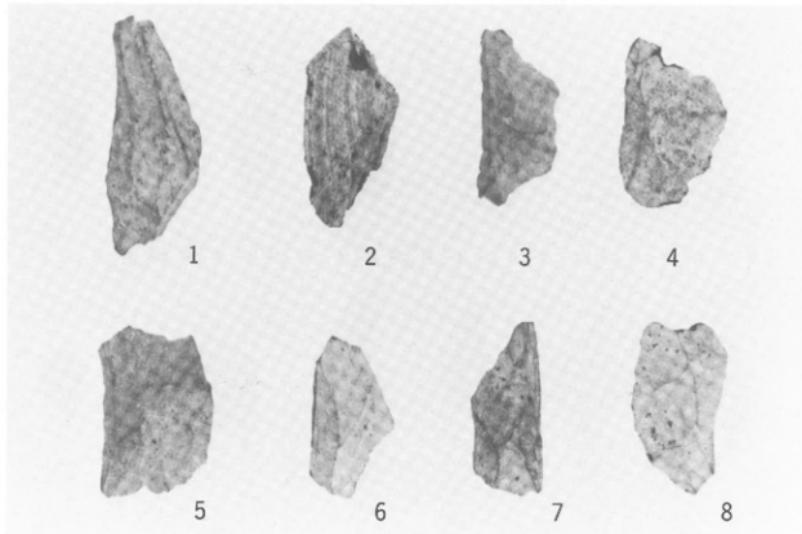
(2) ヤケヤマ遺跡出土ナイフ形石器（腹面）



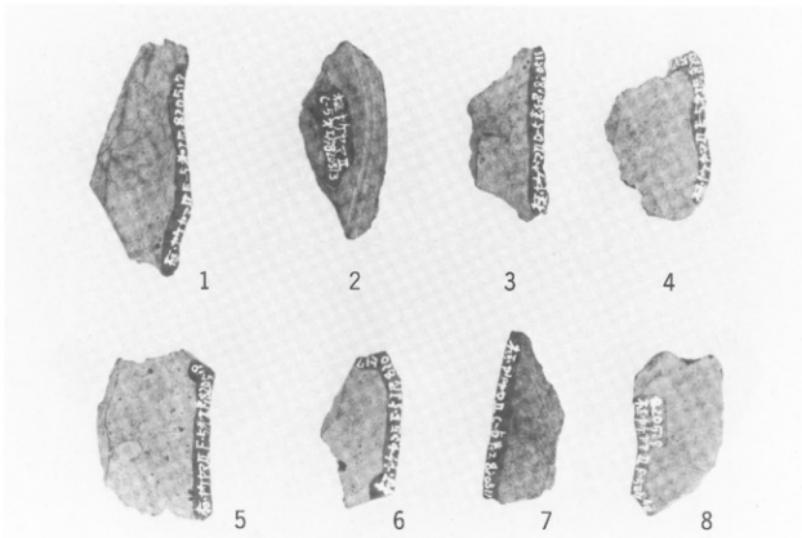
(1) ヤケヤマ遺跡出土ナイフ形石器（背面）



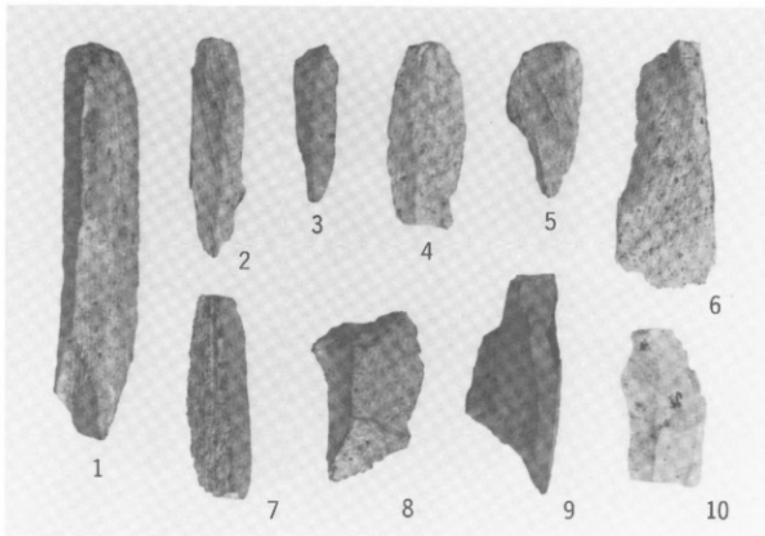
(2) ヤケヤマ遺跡出土ナイフ形石器（腹面）



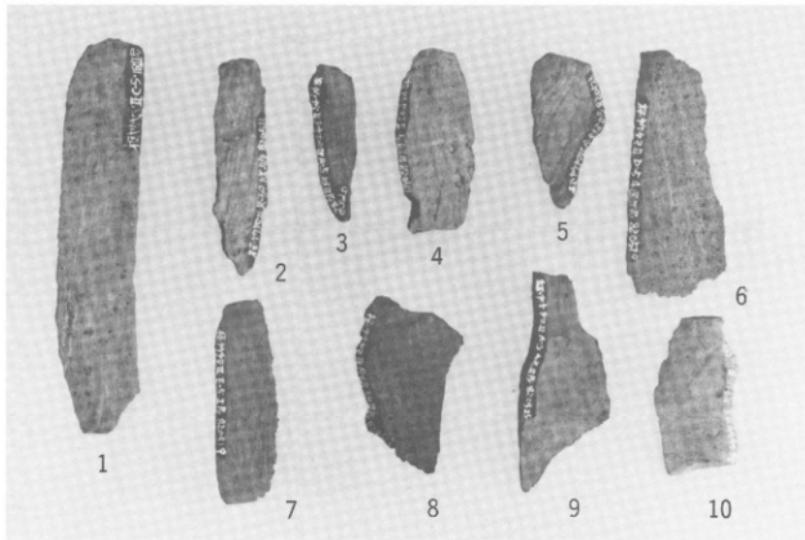
(1) ヤケヤマ遺跡出土横長剝片（背面）



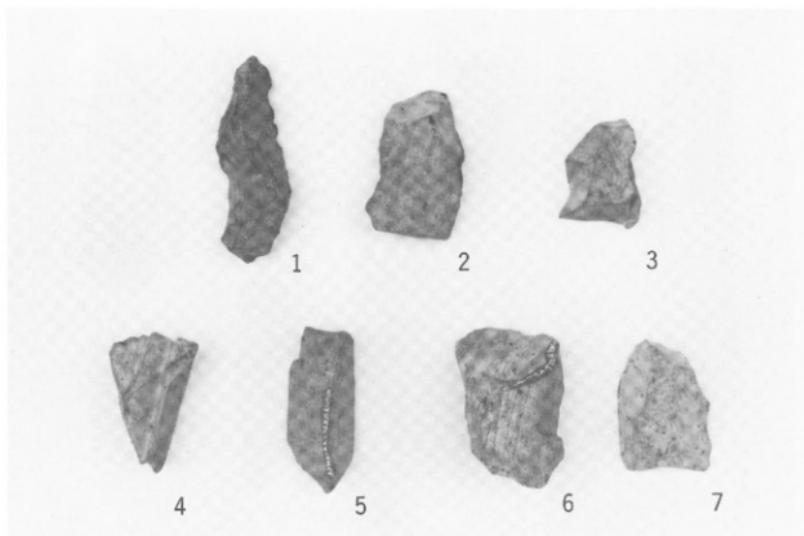
(2) ヤケヤマ遺跡出土横長剝片（腹面）



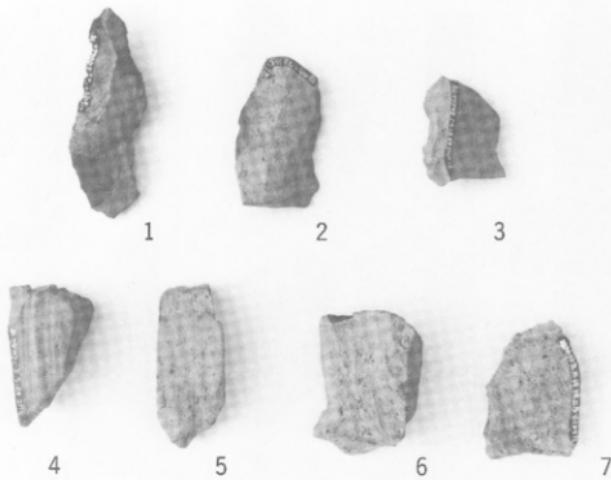
(1) ヤケヤマ遺跡出土縦長剝片（背面）



(2) ヤケヤマ遺跡出土縦長剝片（腹面）



(1) ヤケヤマ遺跡出土横長・縦長削片石核



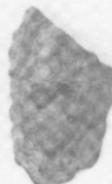
(2) ヤケヤマ遺跡出土横長・縦長削片石核(裏面)



(1) ヤケヤマ遺跡出土細石刃（背面）



(2) ヤケヤマ遺跡出土細石刃（腹面）



(3) ヤケヤマ遺跡出土尖頭器



(4) ヤケヤマ遺跡出土尖頭器（裏面）



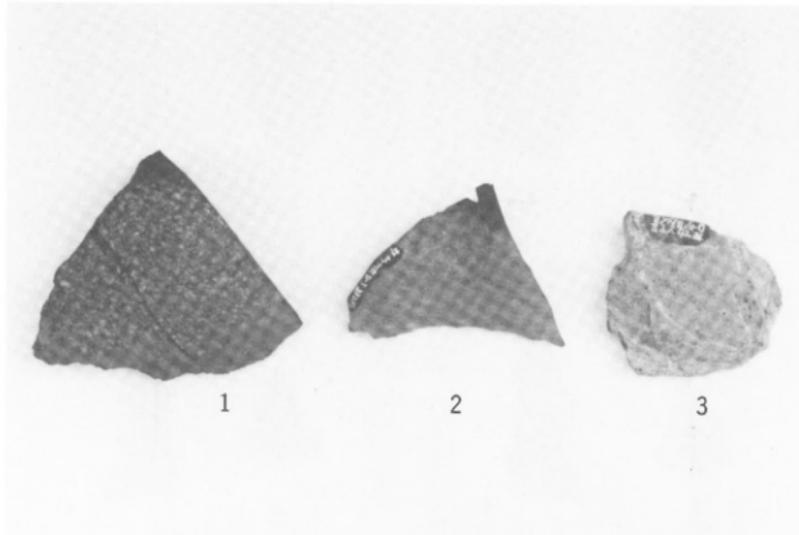
(5) ヤケヤマ遺跡出土二次調整ある剝片(背面)



(6) ヤケヤマ遺跡出土二次調整ある剝片（腹面）



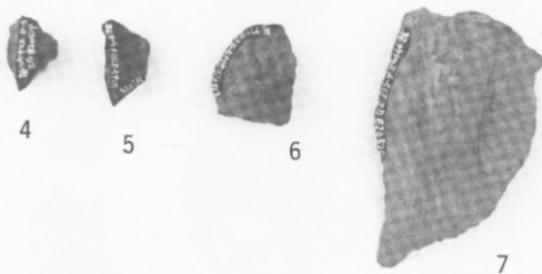
(1) ヤケヤマ遺跡出土チョッピング・トゥール、スクレイバー（背面）



(2) ヤケヤマ遺跡出土チョッピング・トゥール、スクレイバー（腹面）



(1) ヤケヤマ遺跡出土二次調整ある剥片（背面）



(2) ヤケヤマ遺跡出土二次調整ある剥片（腹面）



(3) ヤケヤマ遺跡出土石鏃



(1) 南端調査区出土土師器楌

(2) 南端調査区出土土師器楌



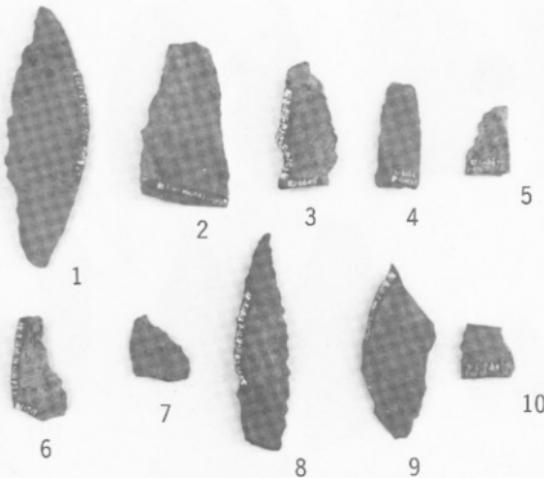
(3) 南端調査区出土土鍤



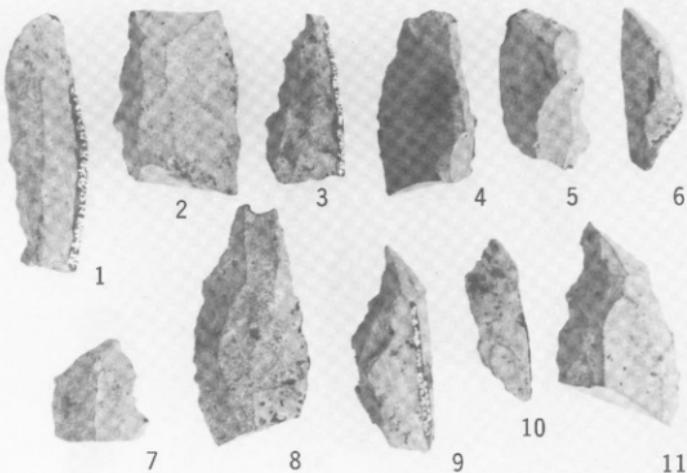
4 南端調査区出土輸入磁器



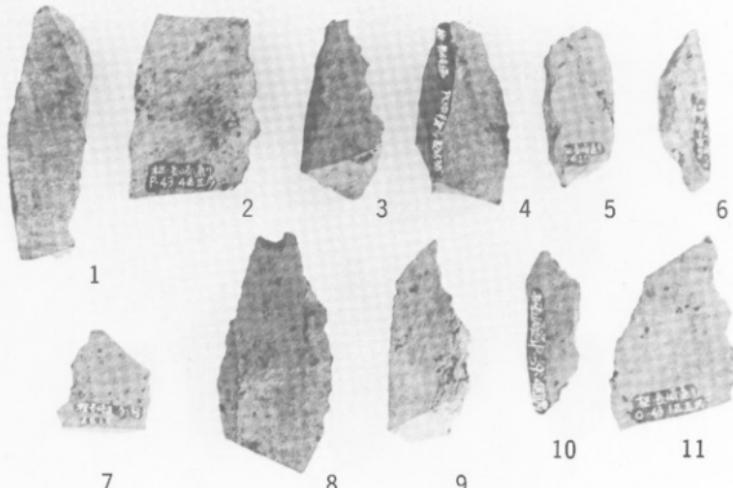
(1) 長崎通り遺跡出土ナイフ形石器の①類（背面）



(2) 長崎通り遺跡出土ナイフ形石器④類（腹面）



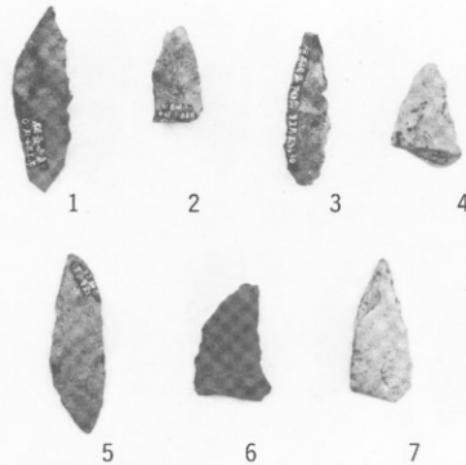
(1) 長崎通り遺跡出土ナイフ形石器②・③類（背面）



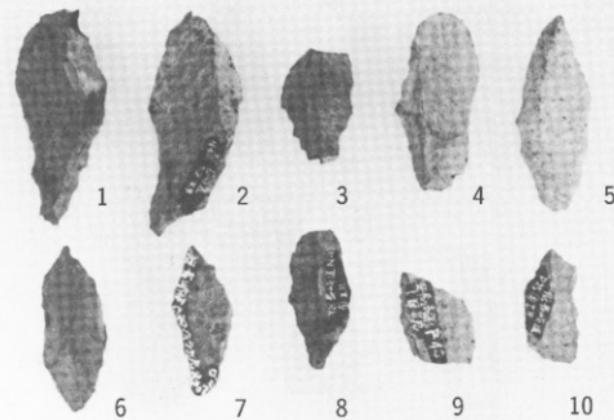
(2) 長崎通り遺跡出土ナイフ形石器②・③類（腹面）



(1) 長崎通り遺跡出土ナイフ形石器④類（背面）



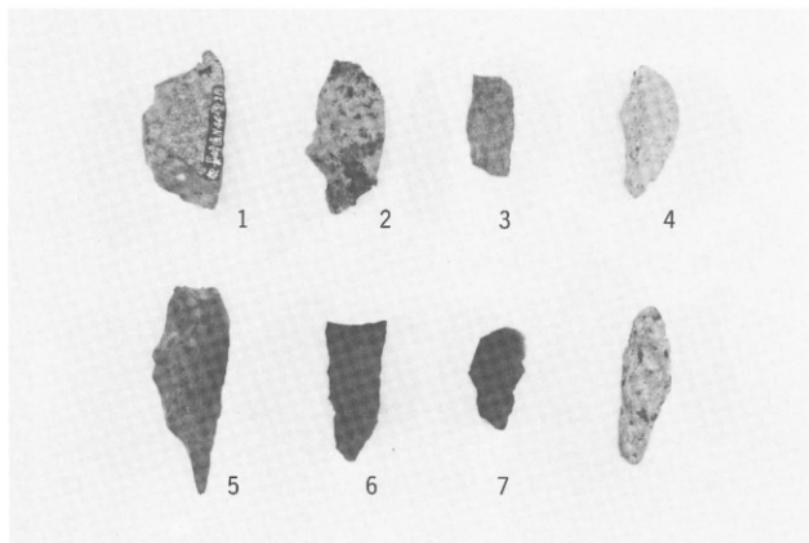
(2) 長崎通り遺跡出土ナイフ形石器④類（腹面）



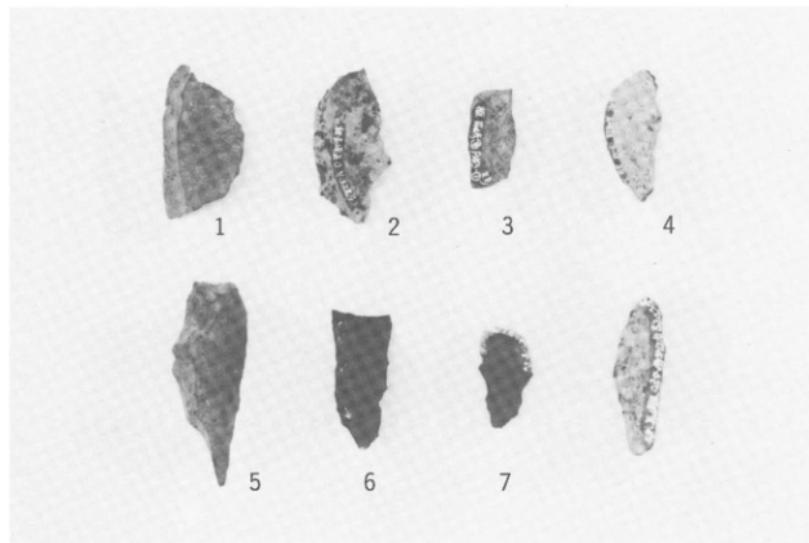
(1) 長崎通り遺跡出土ナイフ形石器⑤類（背面）



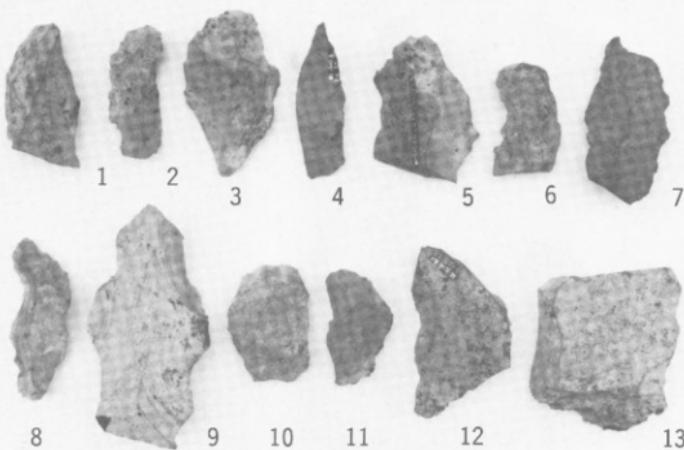
(2) 長崎通り遺跡出土ナイフ形石器⑤類（腹面）



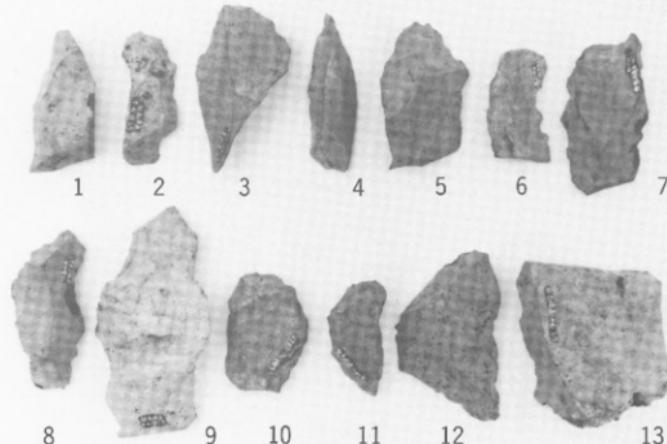
(1) 長崎通り遺跡出土ナイフ形石器⑥類（背面）・舟底形石器



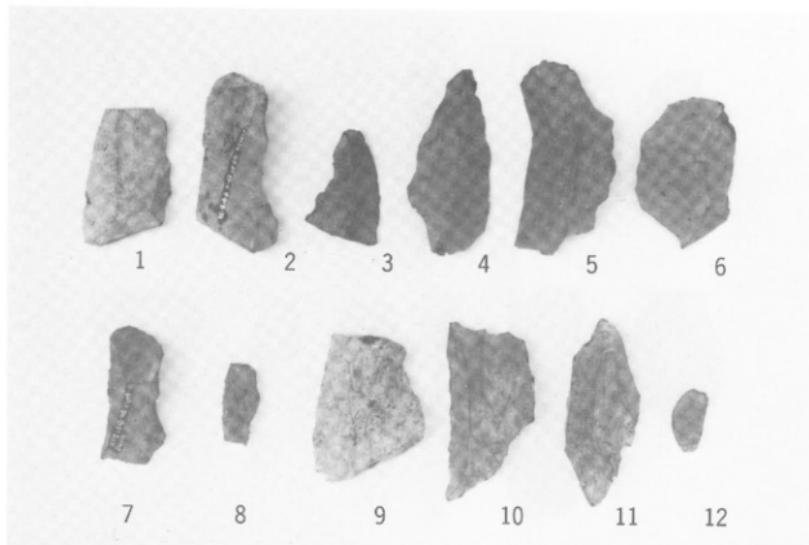
(2) 長崎通り遺跡出土ナイフ形石器⑥類（腹面）・舟底形石器



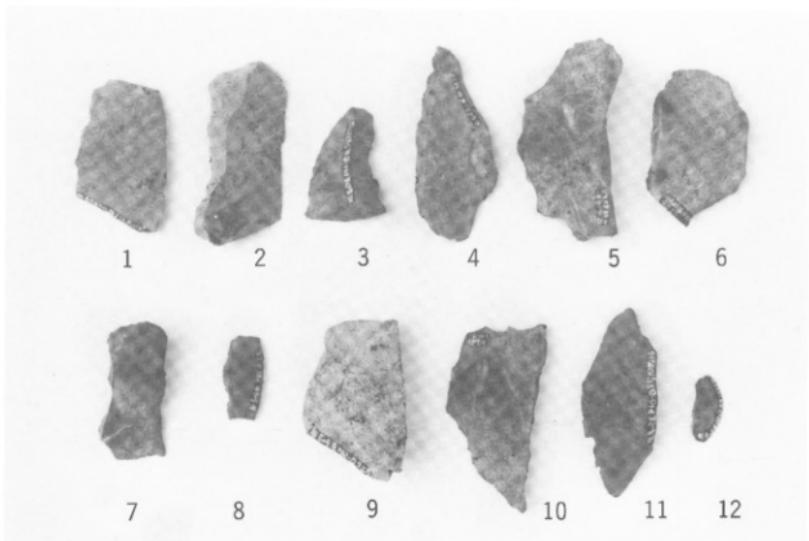
(1) 長崎通り遺跡出土横長剝片石核



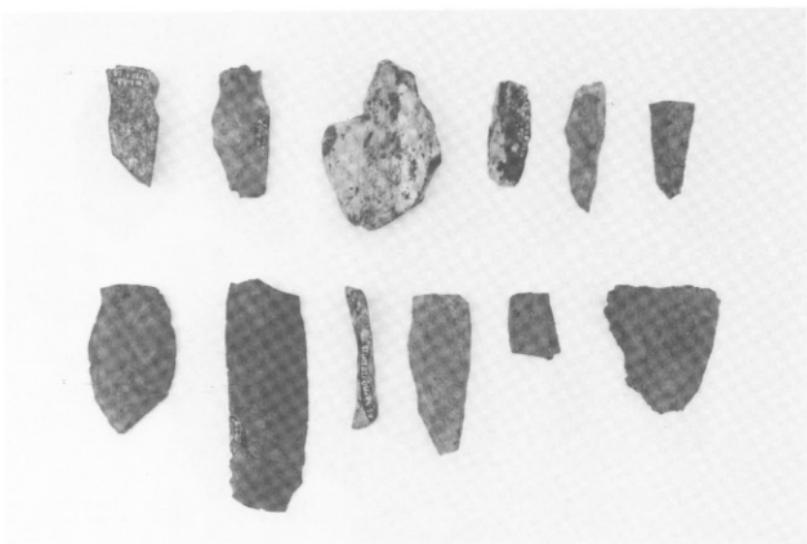
(2) 長崎通り遺跡出土横長剝片石核（裏面）



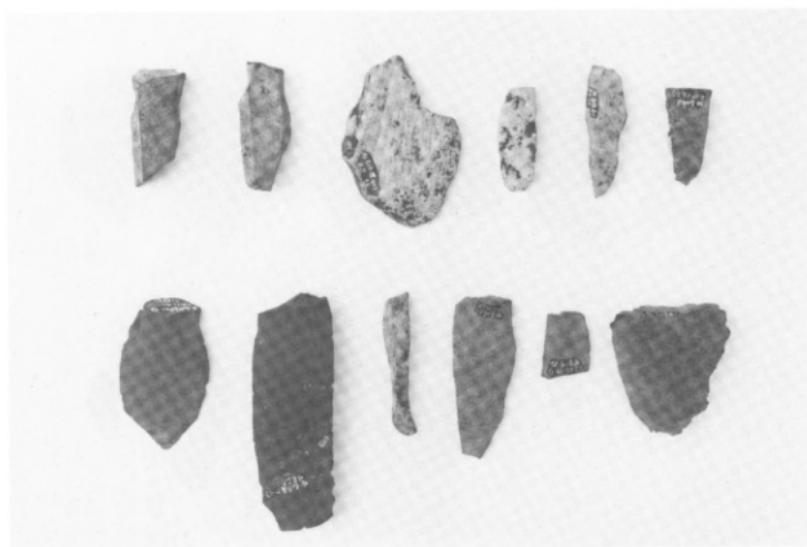
(1) 長崎通り遺跡出土横長剝片（背面）



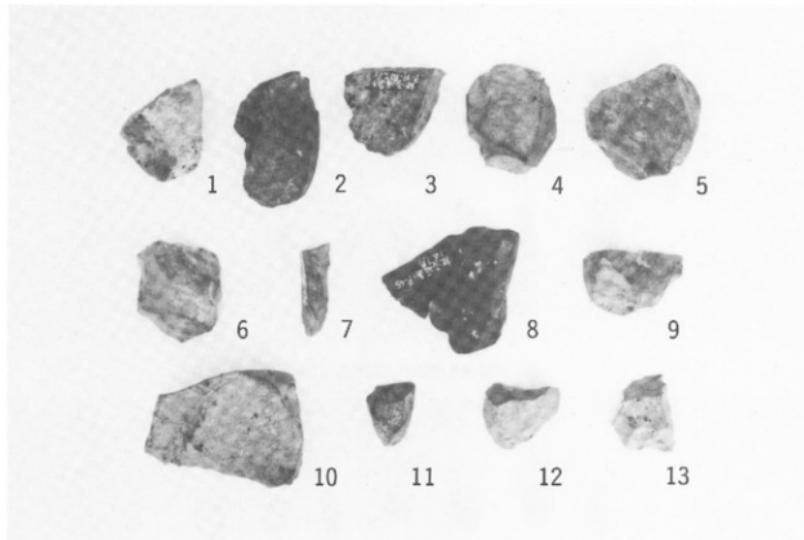
(2) 長崎通り遺跡出土横長剝片（腹面）



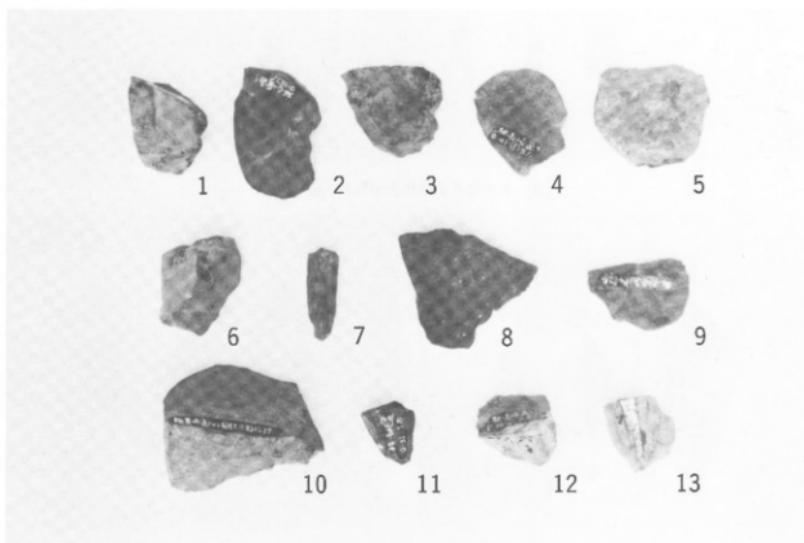
(1) 長崎通り遺跡出土縦長削片石核・縦長削片



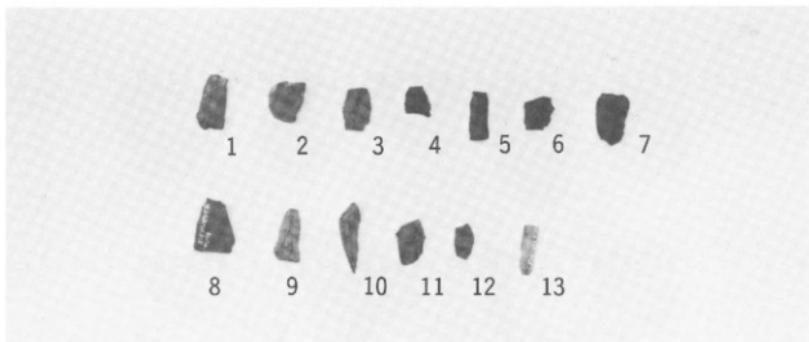
(2) 長崎通り遺跡出土縦長削片石核・縦長削片（裏面）



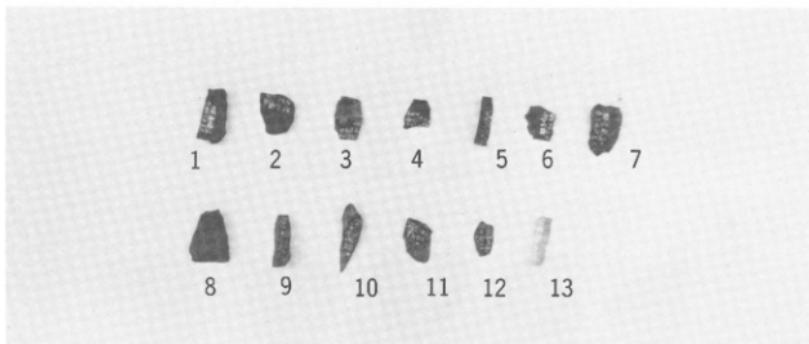
(1) 長崎通り遺跡出土細石刃核



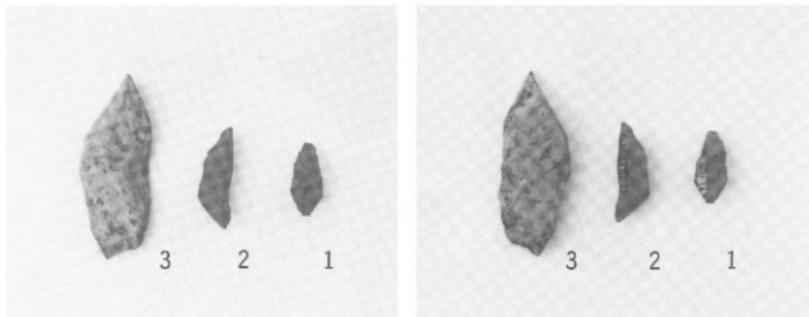
(2) 長崎通り遺跡出土細石刃核（裏面）



(1) 長崎通り遺跡出土細石刃（背面）

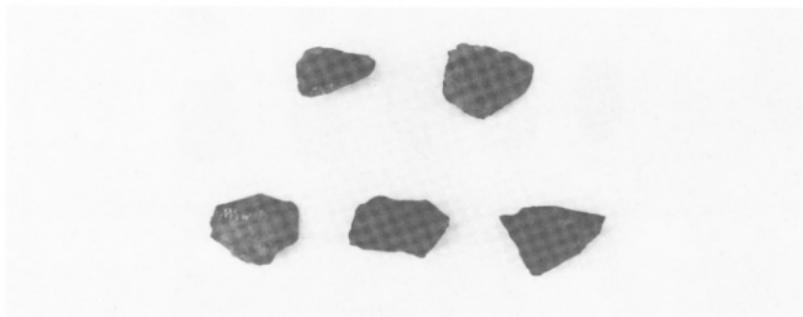


(2) 長崎通り遺跡出土細石刃（腹面）

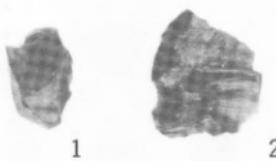


(3) 長崎通り遺跡出土二次調整ある刺片（背面）

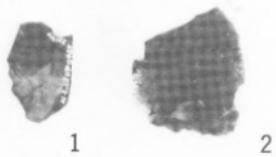
(4) 長崎通り遺跡出土二次調整ある刺片（腹面）



(1) 長崎通り遺跡出土細石刃核未製品

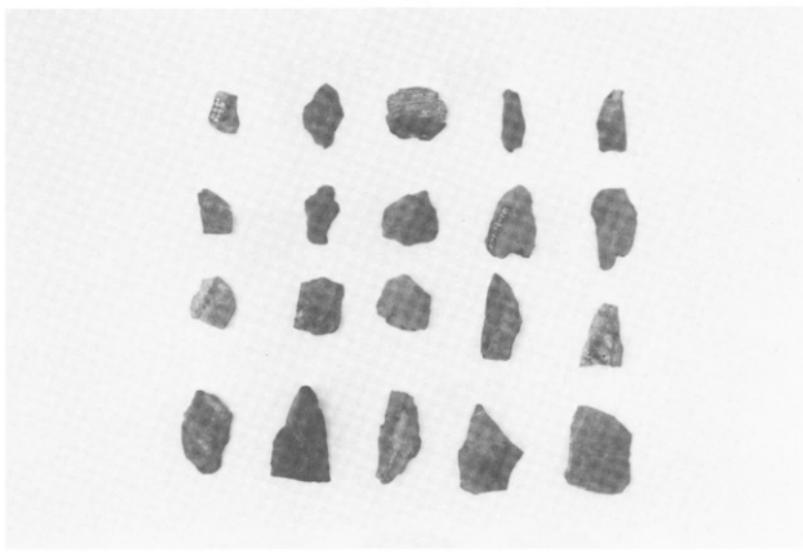


1 2

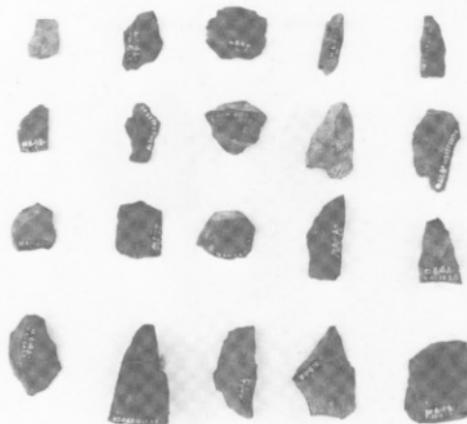


1 2

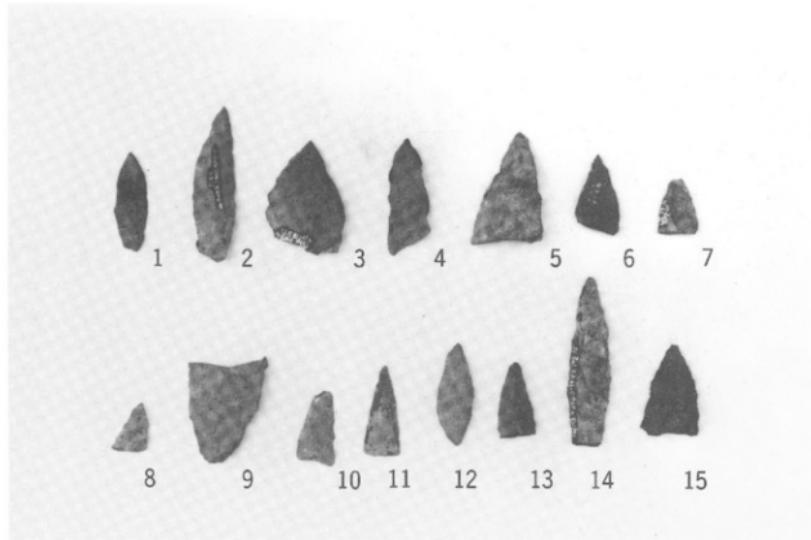
(2) 長崎通り遺跡出土黒曜石剝片



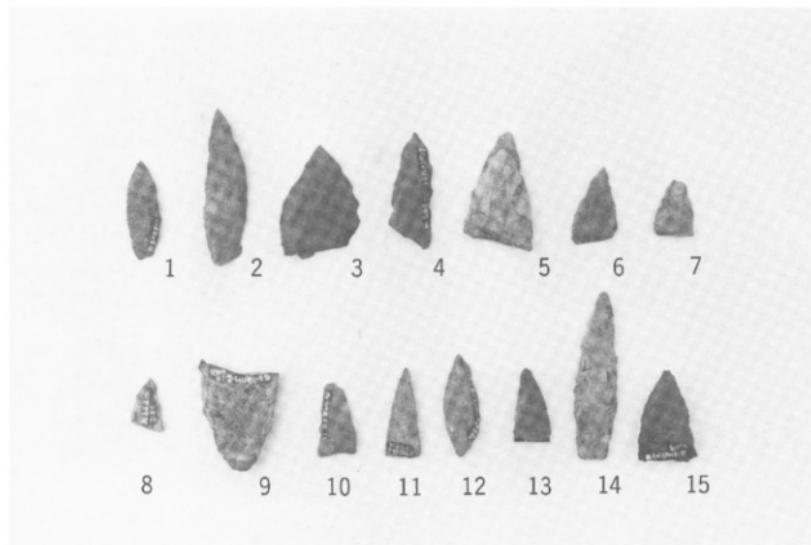
(1) 長崎通り遺跡出土ハリ質安山岩削片



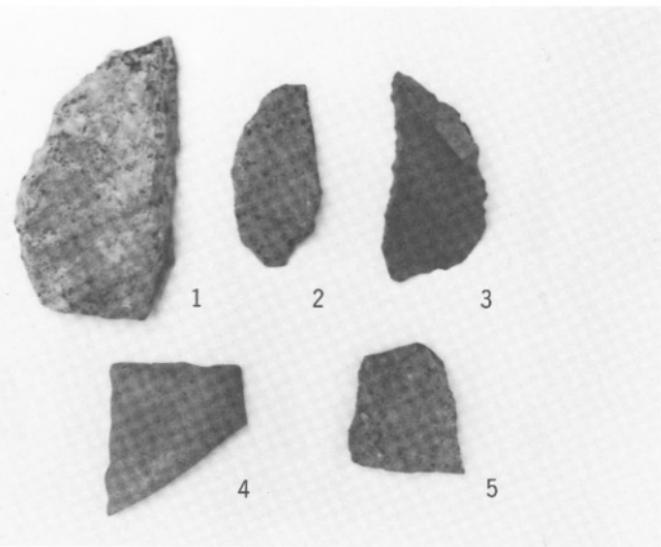
(2) 長崎通り遺跡出土ハリ質安山岩削片（裏面）



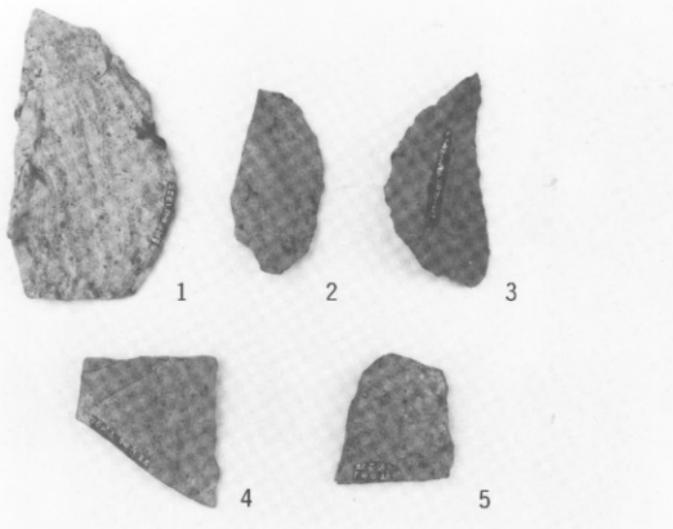
(1) 長崎通り遺跡出土尖頭器



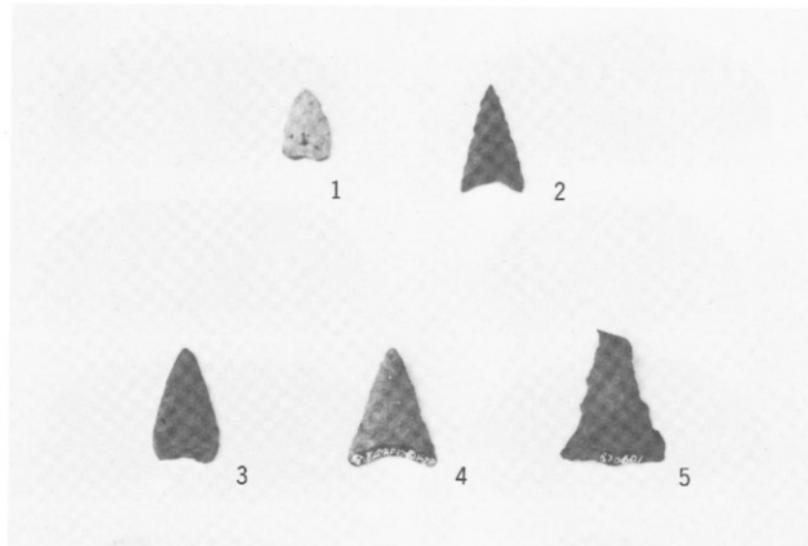
(2) 長崎通り遺跡出土尖頭器（裏面）



(1) 長崎通り遺跡出土スクレイパー



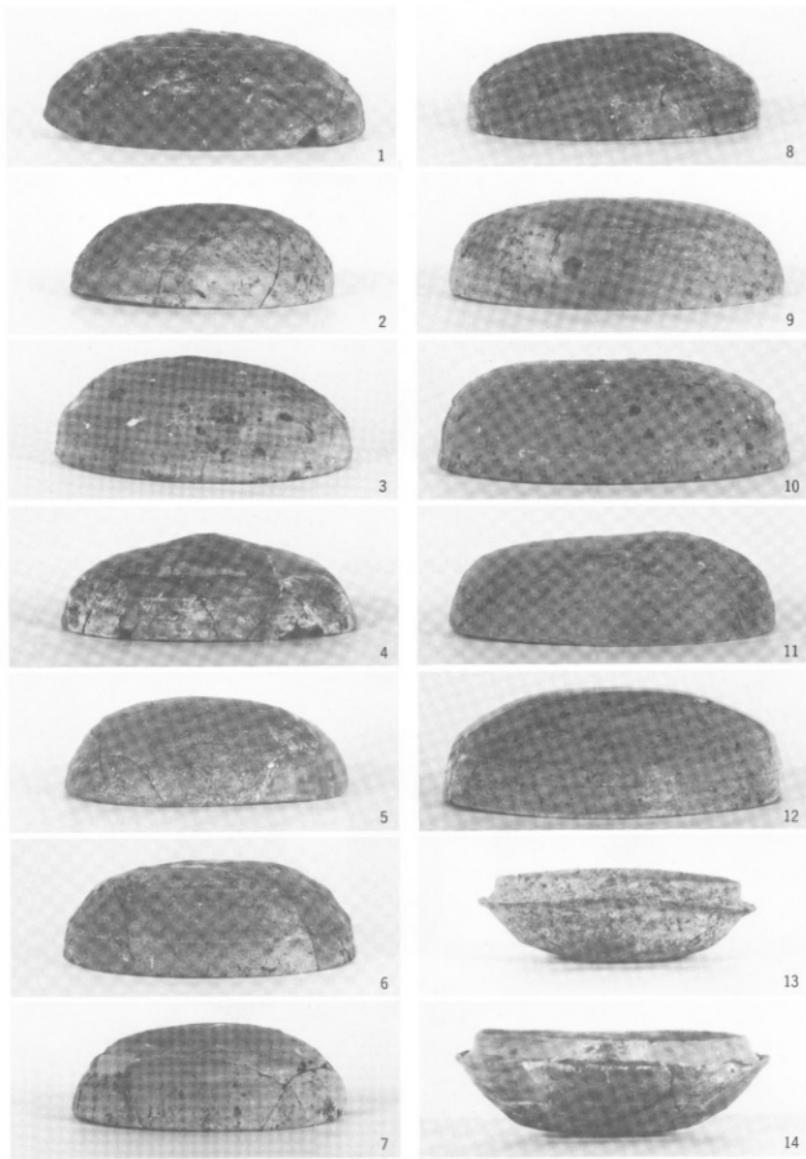
(2) 長崎通り遺跡出土スクレイパー（裏面）



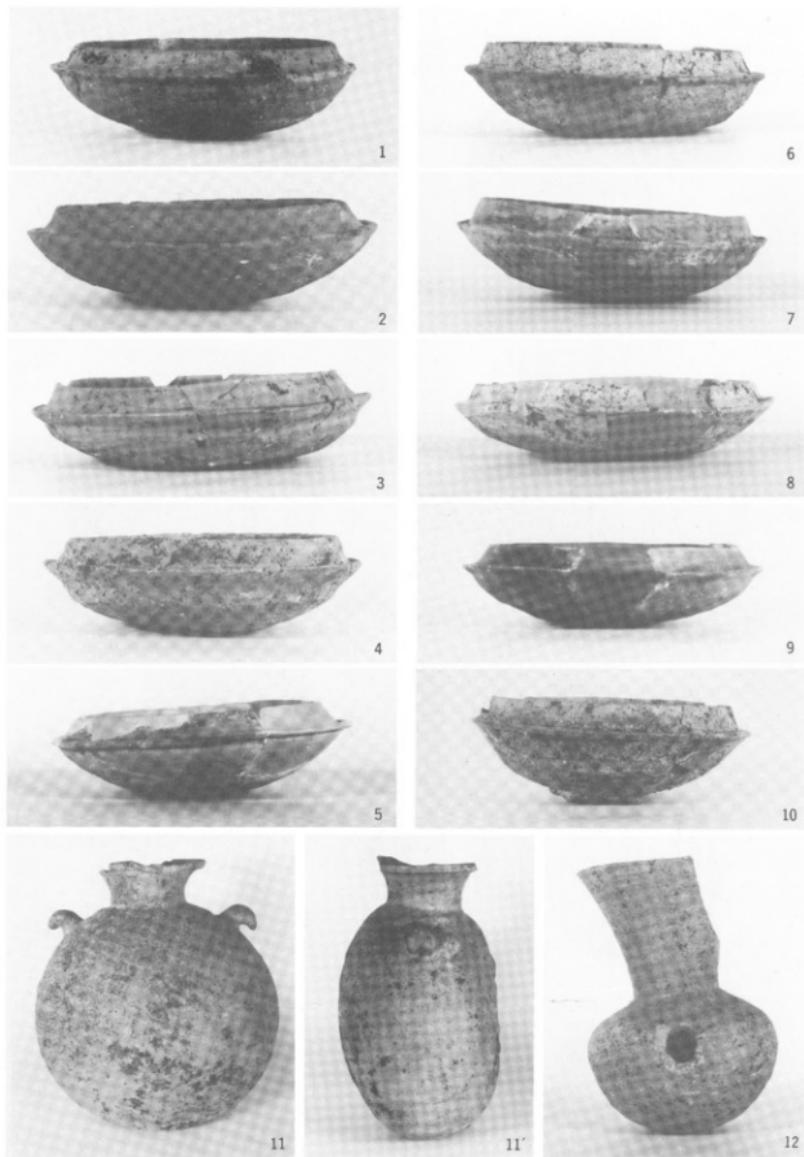
(1) 長崎通り遺跡出土石鎌・ドリル



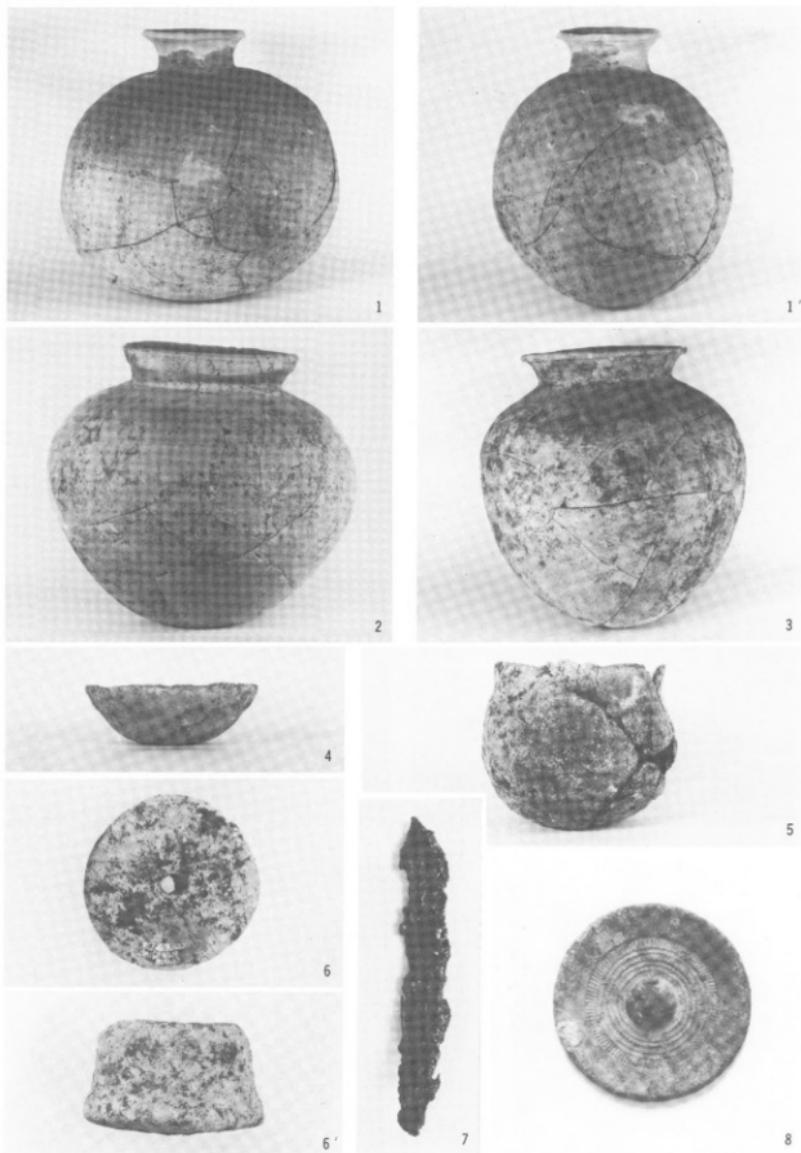
(2) 長崎通り遺跡出土叩き石



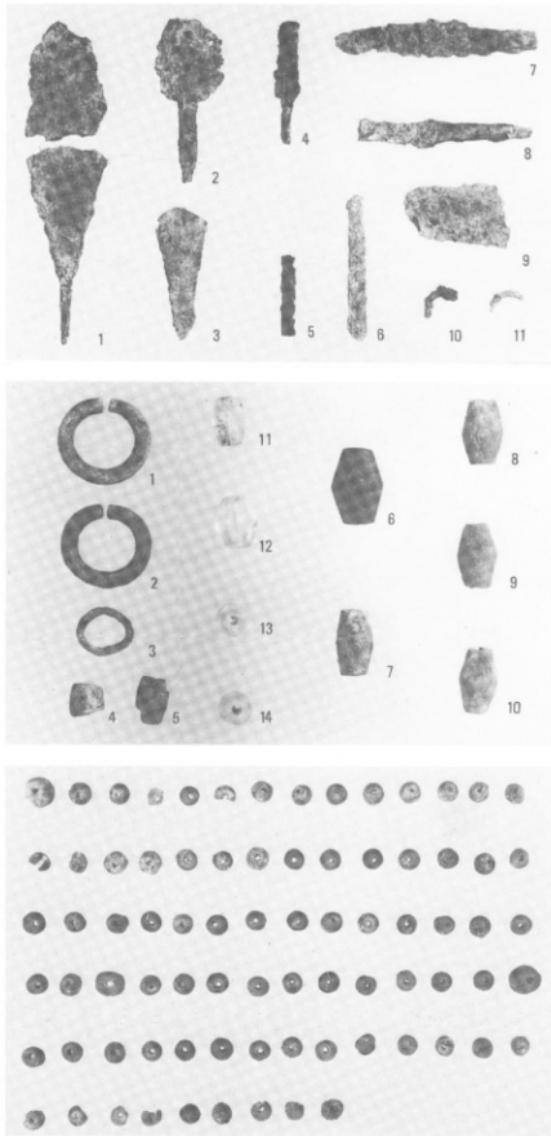
長崎古墳出土須恵器杯蓋・杯身



長崎古墳出土須恵器杯身・提瓶・頸



長崎古墳出土須恵器横瓶・壺、土師器杯・壺、歩渡島 1 号棺出土鉄器、鏡



長崎古墳出土装身具

IV 櫃石島大浦浜遺跡の遺物整理

櫃石島大浦浜遺跡の遺物整理

昭和55年度から開始した大浦浜遺跡の調査は、昭和57年度前半で当初の予定を終了した。二年余りの調査期間中の出土遺物は、コンテナ(281入)にして約1,900箱を数え、縄文時代前期から鎌倉時代まで幅広く検出している。

昭和57年度から本報告書作成準備に着手し、時代順に整理作業を進めている。11月末日までに縄文土器(ヤケヤマ東麓地区)と弥生土器の基礎的な整理を終了した。

縄文土器は、大浦浜遺跡の北半部にその分布が見られ、中でもヤケヤマ東麓地区の出土が顕著である。ヤケヤマ東麓地区では、縄文時代後期初頭に比定できる貝殻廃棄土坑4ヶ所と焼石によって構成される「集石遺構」が検出された。この遺構群の上部に堆積していた包含層からはコンテナ80箱の土器片が出土した。ここではヤケヤマ東麓地区出土の土器に限って概要を述べる。

縄文土器片は大小合せて約16,000点が出土している。そのうち文様片のしめる割合は約20%で、残りは縄文地及び条痕地のものである(第1図)。なお第1図で56%をしめる無文の土器片中には、磨滅して地文が不明確なものも含まれるが、その位置付けについては確定していない。

次に約20%の文様片を時代別に示したのが第2図である。第2図のように、前期約1%, 中期約38%, 後期約53%, 時期不明8%となる。地山面で検出された土坑内から後期初頭中津式の土器片が伴出しているので、前・中期の遺物は二次堆積することができる。

前期に属する土器には、網谷克彦氏の分類⁽¹⁾による羽島下層II式が見られ、大浦浜遺跡では最も古く位置付けられる。昭和56年度概報に掲載した、たては北麓地区の縄文土器の大半が北白川下層I式に属し、羽島下層II式に後続する所謂「羽島下層III式」に比定できる。羽島下層II式・III式土器の明瞭な出土地点の差は、羽島下層式の細分を考える上にも重要な資料となった。

この後、ごく微量ではあるが、磯ノ森式・大歳山式に比定しうる資料も出土している。

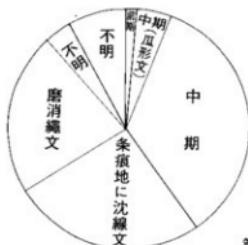
中期土器については型式別細分が完了していないが、凡その傾向として間壁忠彦氏の分類⁽²⁾による船元I式・II式が少なく、船元III式以降の中期中葉へ後半が主体をなす。船元I式期の特徴の一つであるアルカ属貝压痕を持つものはわずか数個体である。現在のところ、前期前半～中期前半期の土器は、極端に言えばわずか数個体分にも満たない土器量であると言える。

後期土器はその大半が中津式に属し、福田K II式等が微量に見られるのみである。

以上のように、土器型式としては、前期前半～後期初頭まで提示することができるが、遺跡



第1図



第2図

の中心となるのは中期中葉～後期初頭である。こうした傾向は大浦浜北半部でも見られ、大浦浜全般の様相と考えて良い。

土器の他には表1に示したように、石器が多数出土しているが、前述のような状況での出土であり時期を特定することができない。時期別の石器組成については、類例を待って検討していきたい。
(真鍋)

注

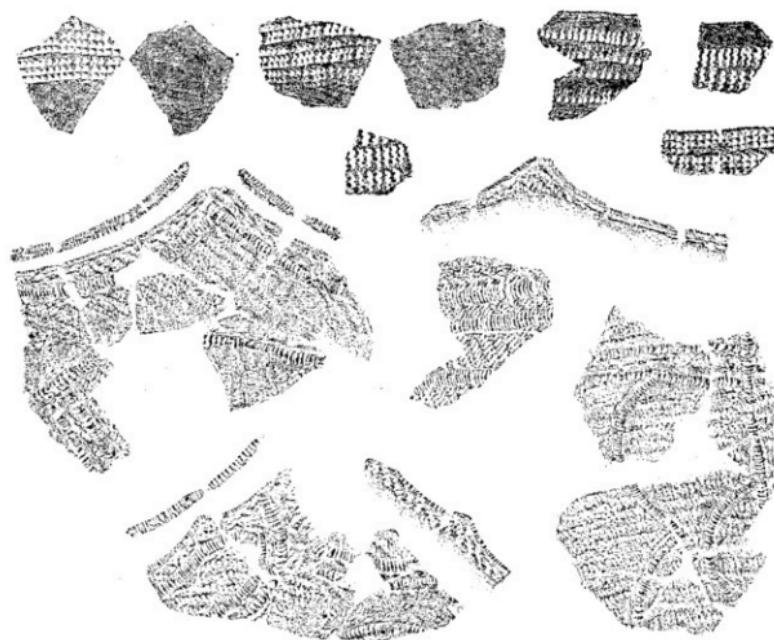
網谷克彦「鳥浜貝塚出土縄文時代前期土器の研究」

(1)「鳥浜貝塚1980年度調査概報」 1981年 福井県教育委員会

(2) 間壁忠彦・間壁蘿子「里木貝塚」 1971年 倉敷考古館

石	鐵	188
石	匙	41
石	錘	63
打 製 石	斧	12
凹	石	6
敲 石 ・ 磨 石		11
ス・ク レ イ パ ー		188
	計	439

第1表 大浦浜遺跡ヤケヤマ東麓地区縄文石器一覧表 (82. 11. 30現在)



第3図 縄文土器拓影(1)

(1/3)



第4図 楪文土器拓影(2)

(1/3)



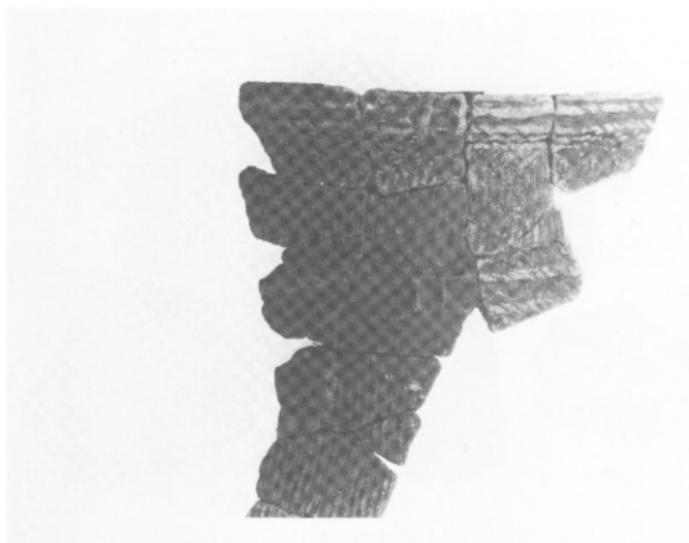
第5図 縄文土器拓影(3)

(1/3)

図 版



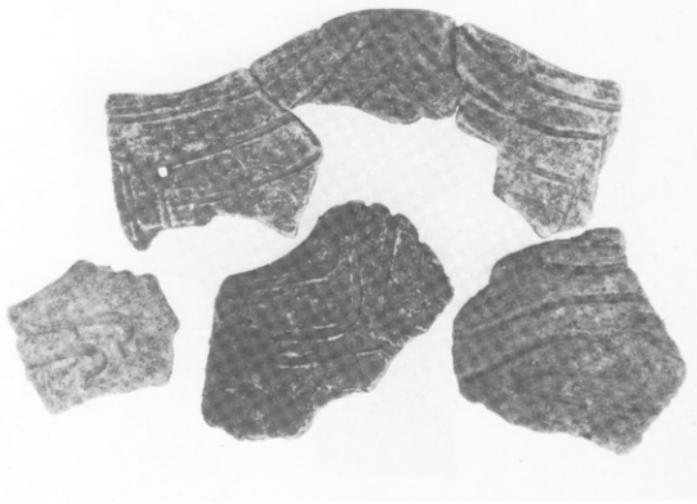
(1) 前 期 末 (大歳山式)



(2) 中 期 後 半 (里木II式?)



(1) 後 期 初 頭 (中津式)



(2) 後 期 初 頭 (中津式)

付載 檜石島より出土した貝類の考察

香川県立坂出高等学校教諭 矢野重文

1. はじめに

瀬戸大橋架橋に伴う塩飽諸島の考古学的調査が昭和51年から継続実施されているが、その中で最北に位置する檜石島より、縄文時代後期及び平安時代の貝殻が発見された。平安時代の貝殻は檜石島東部南よりの大浦浜、縄文後期の貝殻は大浦浜を臨むヤケヤマ東麓より出土した。どちらの場合も、巾数mの貝殻廃棄土坑（縄文・3ヶ所、平安＝1ヶ所）よりの出土である。ここでは、その両者の種類別個体数比を比較することにより、種々の考察を加えてみたい。

2. 考 察

第1表は、縄文後期の貝殻土坑2ヶ所（内、1ヶ所は、土坑の下半分を合成樹脂で固めて標本にしたため、今回分析したのは上半分と更に他の1ヶ所である）と第2表は、平安の貝殻土坑1ヶ所から出土した貝殻を種類別に分け、個体数を数えて構成比を



第1図

出し、それを生息場所により干潟と磯に分けて、一覧表にしたものである。

第1表 縄文時代後期の貝殻(1)
(ヤケヤマ東麓地区)

	種名	個体数	割合
干 潟 の 巻 貝	ウミニナ	1263	34.9%
	ホソウミニナ	453	12.5%
	イボウミニナ	350	9.7%
	フトヘナタリ	96	2.6%
	ヘナタリ	18	0.5%
	ハナツメタ	1	0.0%
磯 の 巻 貝	スガイ	920	25.4%
	イシダタミガイ	267	7.4%
	コシタカガニガラ	62	1.7%
	イボニシ・レイシ	47	1.3%
	オオヘビガイ	15	0.4%
	クマノコガイ	1	0.0%
陸 貝	アマガイ	1	0.0%
	ヒザラガイ	1	0.0%
	ヤマタニシ	8	0.2%
	セトウチマイマイ	1	0.0%
			0.2%
			(9)

第1表 縄文時代後期の貝殻(2)
(ヤケヤマ東麓地区)

	種名	個体数	割合
干 潟 の 二 枚 貝	オオノガイ	30	0.8%
	ミルクイガイ	20	0.6%
	ハマグリ	10	0.3%
	カガミガイ	7	0.2%
	アサリ	6	0.2%
	オニアサリ	6	0.2%
磯 の 二 枚 貝	マテガイ	5	0.1%
	オキシジミ	4	0.1%
	サルボウガイ	2	0.1%
	ウチムラサキガイ	1	0.0%
	オオトリガイ	1	0.0%
	チリボタン	12	0.3%
磯 の 一枚 貝	イタボガキ	7	0.2%
	コケゴロモガキ	5	0.1%
	ケガキ	4	0.1%
	計	3624	100%
			100%
			0.8%

第2表 平安時代の貝類

(大浦浜地区)

	種名	個体数	割合
干渉の巻貝	ホソウミニナ	4576	91.1%
	ウミニナ	131	2.6%
	イボウミニナ	44	0.9%
	ヘナタリ	17	0.3%
	アラムシロ	1	0.0%
	イシダタミガイ	193	3.8%
	イボニシ	26	0.5%
	スガイ	14	0.3%
	クマノコガイ	4	0.1%
	オガイ	4	0.1%
磯の巻貝	オオヘビガイ	2	0.0%
	サザエ	1	0.0%
	レイシ	1	0.0%
	ウノテシ	1	0.0%
	ツボミガイ	1	0.0%
	ヒザラガイ	1	0.0%
	アサリ	4	0.1%
	ハマグリ	1	0.0%
	アケガイ	1	0.0%
	マガキ	2	0.0%
計		5025	100%
			100%

注

1) 個体数の数え方

破片等で種の同定不可能なものは省略した。名前のわかるものでも壊れていくつかの破片に分散している場合もあるので、各種とも一番残りやすい部分に注目し、その数をもって個体数とした。たとえば、コシタカガンガラ・スガイなどは軸、イシダタミガイなら口、二枚貝は殻頂部で右殻・左殻の内多い方などである。ただし、注目した部分以外の破片でも、明らかに別個体とわかる場合は、それも1個体として扱った。

2) イボニシとレイシ

磯の巻貝の内繩文後期のイボニシとレイシは、色が抜けで判別がむづかしかったので、ここでは、便宜的に同一種として扱った。両種共磯の岩に付着し、味も同様に苦味があるなど共通点が多いが、レイシの方が潮間帯のより下部に生息し、少し大型である。

3) ヒザラガイ

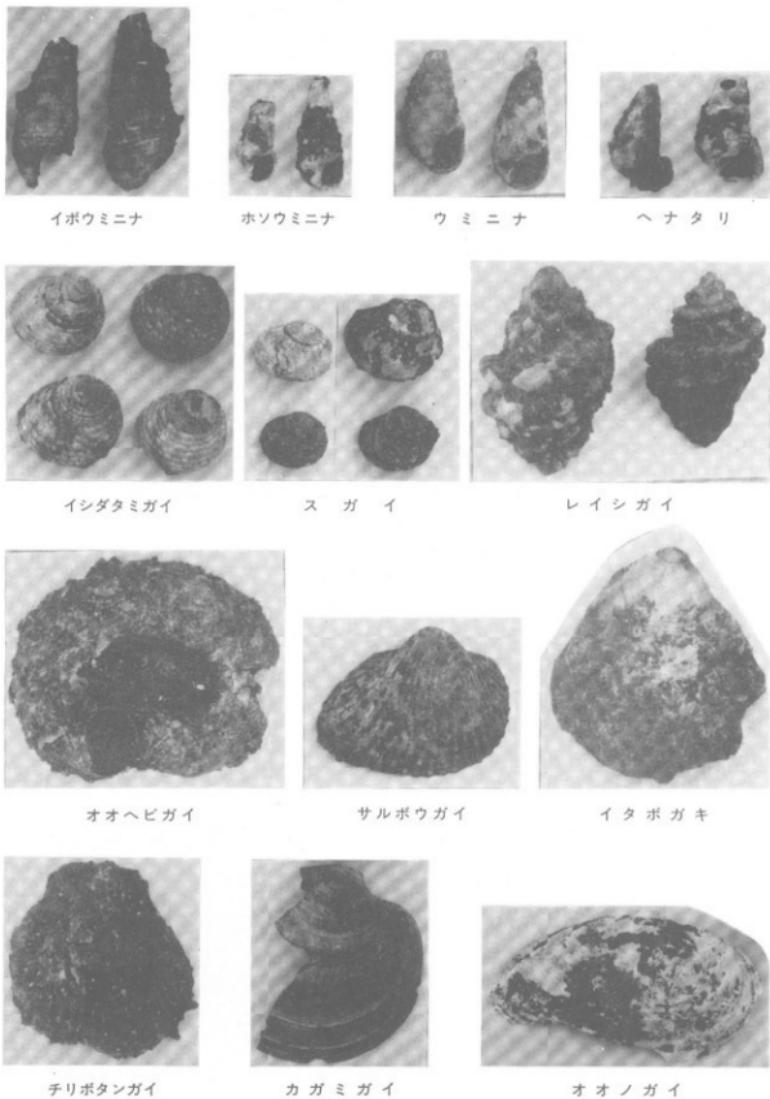
ヒザラガイは多板網に属し、巻貝(腹足綱)ではないが、海辺の人々は一般に笠貝類(巻貝の内、笠形をしているもの)に近いものというらえ方をしているので、ここでは点線で区画して巻貝の仲間に含めた。

(1) 二枚貝はなぜ少ないか

第1の特徴として、両時代とも二枚貝の比率が小さいことがあげられる。繩文後期は種類数でこそ14種類で巻貝の15種類に匹敵するが、個体数では3.3%しか占めず、平安時代に至っては、わずか0.2%である。一方巻貝は、繩文後期96.7%、平安時代99.8%と圧倒的多数を占めている。現代の干渉狩りの対象はほとんど二枚貝(主にアサリ)であるのに、この結果は一体何を物語るのであろうか。それは、「砂質や砂泥質の干渉が未発達なため、二枚貝の生息個体数が少なかったせいであろうか」と短絡的に考えることもできるが、それは間違いである。巻貝の方を見ると、繩文・平安共に個体数において上位を占めるウミニナ科貝類(ウミニナ・ホソウミニナ・イボウミニナ・ヘナタリ・フトヘナタリ)は、磯でなく干渉の貝類なのである。この貝類は、砂質や砂泥質の干渉の表面を這って生活している。この科の貝類だけを取り上げてみても、繩文後期で60.2%、平安時代で94.9%も占めているので、当然良好な干渉が存在したと考えなければならず、二枚貝も豊富に生息していたことが考えられる。従つて、二枚貝の比率が小さいのは二枚貝をあまり採集しなかったからであるということがわかる。それでは、なぜ二枚貝をあまり採集しなかったのであろうか。それは貝収の総量を考えれば見当がつく。たとえば平安時代を例にあげると、上坑1ヶ所から出土した総個体数は5,025個体で、その内、4,576個体(91.1%)はホソウミニナである。このホソウミニナを実際に食べる場合を想定してみよう。たぶんゆでてから肉を抜いて食べたと思われるが、この1個体の肉量は少ないので、おがくとして食べた場合、1回の食事で1人あたり數十個体は必要である。仮に5人家族で1人あたり50個体ずつ食べたとすると、 $4,576 \div 250 = 18.3$ …約20回分しかない。こう考えると、この総個体数5,025個体がいかに少ない数字であるかといふことがわかる。これは繩文後期の3,624個体(十坑の1.5個分)においても同様である。そこで考えられることは、この地域において、貝類の食料としてのウェイトは低かったのではないかということである。つまり食事のつき出しの存在またはおやつの存在でしかなかったのではないか。そう考えると、採集するためにはいちいち掘り出さなければならない二枚貝よりは、干渉や磯を這っている巻貝の方が簡単に採集できるので、より好まれたのではないだろうかと想像される。

(2) 潮間帯の環境復原及びその変化

種類別構成比を比較して一番大きい変化は、ウミニナ・イボウミニナの減少と、それに対するホソウ



第2図 大浦浜遺跡貝殻土坑出土の貝（その一部）

ミニナの増加である。繩文後期において、ウミニナ・イボウミニナあわせて44.6%も占めていたが、平安時代では3.5%と大きく減少している。それに対してホソウミニナは、12.5%が91.1%と逆に大きく増加している。つまり、ウミニナ・イボウミニナからホソウミニナへという変化が見られるのである。この両者、味においてはほとんど差は見られないが、肉量においてウミニナ・イボウミニナの方が優れているので、両者が混在している場合はウミニナ・イボウミニナの方が嗜好されると思う。それにもかかわらず、平安時代においてホソウミニナが大部分を占めているということは、環境の変化による種の変化と考えざるを得ない。現代の干潟の調査において、砂泥地ではこの3種ともに生息するが（和歌山市新和歌浦など）砂地ではホソウミニナが優先する（三豊郡仁尾町父母海水浴場・観音寺市有明浜・丸龜市土器川河口・坂出市綾川河口など）という事実がある。この事実から考えて、繩文後期には砂泥質の広い干潟が広がっていたが、平安時代には砂質の干潟に変わっていたのではないかという推論が成立する。それを裏付ける1つの説がある。それは、気候変化に伴う全世界的な海面変化（水河性海面変化）のフェアブリッジ説である。繩文前期に最高位に達した海面（繩文海進）は、その後弥生前期にかけて海退を続ける（弥生海退）。つまり、繩文後期はその海退の時期なのである。当然、広い砂泥質の干潟が相当広く広がっていたであろうことが考えられる。それに対して、平安時代は古代海進の時期である。砂泥質の広い干潟は水没し、海岸は波の浸食による花崗岩の碎けた砂地になったことが予想される。

（3）陸貝の出土について

繩文後期の貝の中で、ヤマタニシ・セトウチマイマイという陸貝2種の存在が注目される。しかしそれは大量出土ではなく、ヤマタニシ8個体、セトウチマイマイ1個体という少數である。全国的に見れば、カタツムリを食用していたという事例もあるが、ここではあまりに少數なので、食用の対象になっていたとは考えにくい。陸貝は自分の殻を作るために炭酸カルシウムが必要であるが、この貝殻捨て場は、陸貝にとって絶好の炭酸カルシウム供給地である。従って、この9個体の陸貝はこの貝殻捨て場に生息していた、と考える方が妥当であると思う。

3. 現生貝類との比較による考察

昭和57年8月5日。坂出高等学校生物部を引率し、櫃石島の南東端にある歩渡島の干潟にて生息貝類の調査を行った。最初は大浦浜において実施する予定であったが、大浦浜は瀬戸内大橋建設用材置場造成の

ため既に埋め立てられてしまっていたので、仕方なく調査地点を南に移した。海岸から干潟の汀線まで約50m。その間2m間隔に30cm平方の正方形を描き、潮間帯上部より1~25の番号をつけた。次にその区画内の貝類を拾い出し、更に深さ30cmまで掘り下げて地中の貝類もすべて拾い出して、種別個体数を調査した。

（1）歩渡島の干潟はホソウミニナ・アサリ型

巻貝ではホソウミニナ、二枚貝ではアサリが圧倒的多数を占める。两者あわせて86.9%と高い割合を占めるが、実質的には、この割合は更に高くなる。なぜなら、残り13.1%の内、スガイ・マガキは磯の貝であり、たまたまそこに点在していた小石に付着していたものである。また、7個体のオオノガイはすべて死殻であって、この干潟の現生種とは考えにくい。更に、アラムシロは20番の区画からのみ採集されたが、この貝は肉食性なので、たぶんその調査区画に魚等の腐肉が存在し、それに集まっていたものと思われる。以上の分析により、歩渡島の干潟はホソウミニナ・アサリ型と言える。ここで、ホソウミニナは砂性、アサリは砂泥性の貝類なので、言

第3表 歩渡島の干潟にて採集した貝類

	種名	個体数	割合
巻貝	ホソウミニナ	76	35.3%
	スガイ	11	5.1%
二枚貝	アラムシロ	9	4.2%
	アサリ	111	51.6%
貝	オオノガイ	7	3.3%
	マガキ	1	0.5%
計		215	100%
			100%



第3図 現生貝類の採集（歩渡島）

い換えれば、砂質・砂泥質の干潟であると言える。そこで次にホソウミニアとアサリの分布に注目すると、干潟の様子をもう少し詳しく知ることができる。ホソウミニアは調査区画の10~21に、アサリは18~25に分布していた。このことより、ホソウミニアが陸側、アサリが海側に分布していることがわかる。つまり、干潟の陸側は砂性であり、海側は砂泥性に移り変わっていることがわかったのである。これは現地観察からも確かめられた。

(2) 干潟の砂質化

現生貝類の調査では、遂にウミニナの生貝を見つけることができなかつた。しかし、浜における打ち上げ採集では数個体得ることができた。ところがイボウミニナに至っては、打ち上げ採集においてさえ見つけられなかつた。今回の現生貝類の調査は浜をしらみつぶしに調べた訳ではないので、即座に、歩渡島の干潟にはウミニナやイボウミニナは現生しないと断定はできないが、干潟の環境から考えてその可能性は高い。そこで既に埋め立てられてしまった大浦浜の干潟であるが、仮に歩渡島の干潟と同じ環境であったと仮定すると、ウミニナ・イボウミニナがほとんど消滅したことより、平安時代以後干潟の砂質化が更に進んだことが予想される。しかし、それはあくまで両方の干潟が同じような環境であったという仮定のもとにおける推測であるが、大浦浜の

干潟が埋め立てられてしまった現在、それ以上の確証是不可能である。ここで歩渡島のオオノガイを取り上げてみたい。オオノガイは砂泥性の二枚貝であつて、土中深く30cmくらい潜り長い水管を地表まで伸ばして生活している。一度潜り込むと、もう他への移動はできない。そのオオノガイがすべて土中で死滅していたのである（調査区画の10~13）。そして、その地表は全くの砂質になつている。そこで考えられることは、いつの時代のことかわからないが、歩渡島の干潟においても、砂泥質から砂質への変化があったということである。

4. 結論

櫻石島より出土した縄文後期と平安時代の貝類を分析した結果、縄文後期には砂泥質であった干潟がその後序々に砂質化が進み、現在ではそのほとんどが砂質化してしまつたことがわかつた。また、縄文後期の砂泥質干潟は縄文海進以後の弥生海退期に形成され、平安時代の干潟の砂質化はその後の古代海進により促進されたのではないかという推論を立てることができた。

今回は、櫻石島という瀬戸内海の1つの島の、それも大浦浜という狭い範囲での考察であったが、今後更にフィールドを広げることにより、上にあげた推論を確証していきたい。

瀬戸大橋建設に伴う
埋蔵文化財調査概報(VI)

初田遺跡
ヤケヤマ遺跡
大浦浜遺跡
長崎通り遺跡
長崎古墳

昭和58年3月31日

編集 香川県教育委員会
発行

印刷 (株)成光社